E－8　住居学のありかたについての研究　その(2)　―“Home Economics”と「家政学」の展望

大阪市大家政　○勝田喜代子　藤原道子
上林博雄

目的　最近における米国の“H. E.”の改革は、わが国における「家政学」の進歩の方向に示唆を与えるであろう。なぜならば、がんらいわが国の新制大学に組み入れられた「家政学」は米国の学制をそのままとり入れたものであったからである。現時点において、米国における状態と対比して、わが国の「家政学」に対する考え方の現状をあきらかにしたい。

方法　本調査は本論文その(1)注の調査と同内容の調査項目により、現在わが国における家政学に関する学部又は学科を持つ四年制の全大学44に対して行なった。

結果

(1) 現在においては“H. E.”と「家政学」の間には大きな断層を生じている。その内容については、発表のときに述べる。

(2) わが国においては、「家政学」に直接関係している人達でさえ、その師表となった“H. E.”の定義に無関心又は無知である例が多い。

(3) 米国においては、社会的needとしての職業に耐える応用学として“H. E.”を考えているのが全てであるのに対し、「家政学」の存在意義は、はなはだあいまいである。

注　藤原，勝田，上林「住居学のあり方についての研究」その(1)